

『群峰』編集に生きている経験

今村 郁夫

今回、近況報告を書く機会を得て、何を書くか考えること幾日。ふと、これまでの仕事の話をしてこなかったなあと思い至りました。教員や文学に直接関わっている方が多い中、全然違う分野の話をするのも面白いだろうし、四号から編集を担当している『群峰』にも関わるとの考えからテーマを定めました。

さて、私が富山文学の会に入会したのは、発足した二〇〇九年のことだったと思います。当時は富山大学大学院の修士二年で、指導教員だった当会の創設者でもある金子幸代先生のすすめもあつたと記憶しています。大学院を修了した後、地元の新聞社に就職し、その後、製版会社に転職しました。製版というのは大雑把に言うと、印刷するために使う版（ハンコのようなもの）を作る仕事です。『群峰』の編集に生きている、これまでの仕事や経験を簡単に紹介したいと思います。

新聞社での仕事

新聞社では、初めに記者として日々の取材や撮影、記事執筆を行ったほか、紙面の組版にも従事しました。新聞は自身の記事が大事なのですが、どういう見出しを立てたら読んでくれるか、どんなレイアウトにしたら目を引き付けられるかを考えながら紙面を組んでいくのは結構面白い仕事でした。もちろん、デスク（統括する人）から大枠の指示はありますが、人によって色が出やすく、これは〇〇さんが組んだ紙面だなと分かることもあるようです（私はその域には達しませんでした）。

このような新聞記者を一年ほどした後、出版部門に異動になりました。ここで担当したのは、月刊誌の連載の取材、記事執筆、企画本や自費出版の編集でした。長くいたこともあり、さまざまな仕事に携わりました。釣りの同行取材や検定の予想問題集の編集、地元プロ野球チームのイヤーズブック制作など、さまざまな方々にお世話になりました。こういう仕事をしていると、著名な方と話ができるので、役得だなあと感じました。釣りの全国組織の北陸支部長と関わられたり、監督やGM（ゼネラル

「マネージャー」となった元メジャーリーガーと話せたり、全国的に有名な作家さんとやり取りできたりと、他ではできないことをたくさん経験しました。振り返ってみると、今だったら、もう少し丁寧にうまくできていただろう仕事もあり、少し心残りもあります。

製版会社での仕事

それはさておき、諸事情あって六年ほど前に今の会社に転職しました。今の会社で私がしていることを簡単に言うと、さまざまな形態で入稿してくるデータを印刷用のPDFに変換しているということになります。データと言っても、おそらく読者のみなさんになじみ深い Microsoft Word やデザイナーが主に使っている Adobe Illustrator など、さまざまです。他にも、決まったレイアウトに原稿を落とし込んで校正刷りを作ったり、前述した印刷するために使う版刷版を出力したりもしています。このように仕事は多岐にわたるため、広範な知識や技術が必要とされることもあり大変ですが、やりがいも感じています。

このようなこれまでの経験が『群峰』の校正のやり取りや、印刷用PDFの作成に生かされていると感じています。『群峰』の編集は大変ではありませんが、その分、やりがいと面白さがあります。今後も富山文学の会にはお世話になると思いますので、よろしくお願いいたします。